

# ボルノーにおける実存主義克服の一考察

—新たな被護性の教育学的意義—

広 岡 義 之

## 1 はじめに

—実存的倫理の危機を克服する〈随意性〉の概念—

本論の目的は、ボルノーの『新しい被護性』（邦訳『実存主義克服の問題』<sup>(1)</sup>）に依拠しつつ、ボルノーの実存主義克服の試みが、いかにして構築されてゆくかを、主として倫理的側面に焦点をしばりつつ、考察してゆくことである。本論ではとくに、この世のなかで守護されていると感じることのできる人間の態度を問い、その教育学的意義を探求してゆく。

ボルノーによれば、実存主義に対して一般に流布されている解釈は、まったく倫理を含まず、「あらゆる固定した規範を破棄して、人間の態度を主体的恣意にゆだねているので、実存主義はむしろ、その最奥の本質にしたがって、一切の倫理的態度を破棄している<sup>(2)</sup>」という。しかし、たとえ体系的に構築された哲学的倫理が、実存哲学に欠如しているからといって、実存哲学が道徳的態度に支えられずにいるとはいいきれない。それでは、実存哲学の道徳的態度の出発点をどこに見いだしたらよいか、という課題が生じてくる。

人間は、明確にくだされた決断に基づいて、可能性の不確かさのなかに埋没しようとしていた自己の現存在を、自己の意志で意義づけることが必要である。つまり、人間は決意性においてはじめて日常的な退廃を脱し、自己の実存の本来性を獲得できるようになる。この決意性は、人間の内的状態のみならず、その必然

的性向にしたがって、行為にも移行してゆく。それゆえ、決意性は無条件の参加・自己投入 (engagement) においても実現される<sup>(4)</sup>。

問題は、これら実存主義的倫理の三つの徳 (決断・決意性・自己投入) そのものにあるのではなく、それらを絶対視することから生ずる人間存在への圧迫である。それゆえ次には、実存主義的一面性の過大視から生じた結果が探究されねばならない。関連する問題を危機を例に考察してみよう。危機はその本質上、持続的状態ではなく例外的状況である。「危機は、生の正常な流れの中断であり、それが自分自身を越えて解放的な解決に向うときにのみ、その実際の機能を発揮する<sup>(4)</sup>。」つまり、危機が人間にとっての唯一の在り方なのではなく、むしろ人間の生は、もっと他の広い重要な領域を含むと考えられる。危機による人間の本質理解は、むしろ例外的一面的ですらある。なぜなら人間の生活にとって、決断の必要もなく過ぎ去る状態の方が、むしろ比重を占めるからである。しかしこのことは、危機による人間の覚醒・若がえりといった、危機のもつ実存的価値を少しも否定するものではない。ただ、絶えざる決意性の要求、過度の危機の強調は、むしろ実存的な硬直の原因の温床となりうることを、意識しておく必要がある。

人間の生活は、それがうまく運ばれている限り、決断を必要とすることなしに経過する。それゆえ、人間が決断をたえず前提にする必然性は全くない。決断を基準として生の方向を定めることは、人間のそれ以外の実り豊かな可能性を自らの手で閉ざし、硬直した一面性へ落ちこむおそれを孕むことになる。このような閉鎖性に対して、ボルノーは、マルセル (Gabriel Marcel, 1889～1973) のいう〈随意性〉 (disponibilité) の概念を導入する。随意性とは、「けっして予見しえない未来のいろいろの可能性に対して自己を開き、…中略…最終的に下された決断から生じる決意性とは厳密に対立する<sup>(4)</sup>」概念である。そうになると、随意性の徳を実存的倫理の硬直と危機を克服する、一つの反徳目として捉えることがふさわしくなる。そこでは、人間の孤立をのり越えるために未来との支持的な関係を獲得する、という要請が浮び上がってくる。

人間は、しかし、自らの手でこのような支持的な関係を獲得できるのであろう

か。ボルノーは、「人間自身がある特定の<sup>①</sup>内面的<sup>②</sup>状態にある限りでのみ、このことが可能である<sup>③</sup>」という。特定の内面的状態とは、人間をとり囲んでいる世界と未来に対して維持される敬虔な信頼 (Vertrauen) の状態のことである。随意性の徳は、この信頼を中心として形成され、そこから〈安らいでいること〉(Getrostsein) ・〈忍耐〉(Geduld) ・〈希望〉(Hoffnung) ・〈感謝〉(Dankbarkeit) という主要な徳が関連しあうことになる。以下の考察の目的は、第一に、上述の諸徳がいかにして、実存主義克服をめざす新たな教育哲学 (教育人間学) の方向を示すかを論証し、第二に、ボルノーの主張するそれらの諸徳が、彼のいわゆる〈非連続の教育学〉とどういう関連にあるのかを探究することである。

## 2 包括的な存在信仰としての安らぎの徳

人間は、ある特定の内面的状態にあるとき、はじめて孤立した瞬間をのり越えて、未来との支持的な関係を獲得することができる。そしてそれが、実存主義克服の一つの課題でもあった。この内面的状態を、さしあたり〈安らいだ気持ち〉(der getroste Mut) と呼ぶことにして、その精神構造の本質を探究してゆくことにする。

現代の不被護性に対抗する可能性が、決意性と絶対的自己投入を代表とする人間自身の最後の強さとして、見いだされてきた。「決意性は、無信仰となった世界の最後の偉大さである<sup>④</sup>。」そこで頼れるものは自己だけなので、人間の決意性は本質的に安らぎえず、寝つくことができない。これに対して、安らいでいる者は、自分が倒れそうになるときでさえ、その自分を守り抱きあげてくれる力が湧き起こることを信頼している。ボルノーによれば、人間は「あらゆる威嚇の背後にはどうしても救助してくれる存在が …中略… 控えていることを確信している、いっそう包括的な存在信仰の基盤のうえで、安らいでいる<sup>⑤</sup>」ことができるのである。

ここで誤解してならないのは、安らいでいることが、素朴な安全さとして人間にむぞうさに与えられているのではない、ということである<sup>⑥</sup>。つまり、この徳

は、人間の力だけで獲得できるものでなく、恩寵として人間に授けられる一面がある。私たちは、ここに安らいでいることの特異なパラドクスをみる。人間は、どれほど勇敢な決意性をもってしても、彼の絶望的孤独からは脱しえない。「人間がこの孤独を克服して、ふたたび世界と生にたいする支持的な連関を獲得しようとするならば、人間は安らいだ生活態度の地盤においてのみ、これを獲得することができる<sup>84</sup>」のである。

他方でボルノーは、同じテーマを『教育的雰囲気<sup>85</sup>』において、次のように論じている。つまり彼は、子どもの健全な人間的発達にとって、子どもにこの世界のなかで、安らぎをいだかせる雰囲気が不可欠であることを強調する。意味のある安心して安らげる世界は、幼児にとってさしあたり、母親に対する人格的な信頼関係のなかに開ける、といえよう。それゆえ、被護されているという普遍的な気分は、人生の発端から、愛される特定の関係と結びついているのである。しかし、「信頼によって支えられ、完全に支配されている子どもの世界は、実ははじめから、無常の芽をはらんでいる。…中略…なぜなら、いつかは母親の人間的不完全さがわかってくるからである<sup>86</sup>。」

ここに教育の新たな課題が生じてくる。つまり、信頼が崩れるとき、人間はどうしたらよいのか、という問いである。ボルノーは、教育者は、すべての幻滅のなかにある一般的な信頼へ、子どもを導いてゆくことが重要である、という。「この新たな信頼の形成、あらゆる禍いと脅威にもかかわらず、なお究極の根底においては〈全き世界〉のなかに包まれているという感情の確立、これがあらゆる教育の中心的課題である<sup>87</sup>。」なぜなら、人間の生は究極的に人間を支えるものなしに、けっして存立しないからである。人間の生は高齢にいたるまで、不安と安らぎの二重性のなかに置かれている。それゆえ、被護性の領域は、くりかえし襲ってくる脅威に抗しつつ、つねに努力して獲得されねばならない。しかし同時にそれは、どこまでも恩寵のような形で、自己の外から与えられる性質のものなのである。

### 3 ゆるぎない信頼に支えられた忍耐の徳

人間の生を迫いたてる決意性は、忍耐の欠如として捉えられる。それゆえ、忍耐の能力や静かに待つことへの能力は、実存主義的硬直から脱する一つの方向性を示すものと考えられる。ボルノーは、忍耐とは「人びとが客観的な時間的推移を望む度合と、客観的な時間推移自体との間の調和のなかにある<sup>64)</sup>」と述べている。つまり、性急さと焦燥にたえず落ちこむおそれのある人間が、本来的に熟するときまで待つようにしむける働きを、忍耐の徳と呼ぶのである。以下の課題は、人間が生きてゆくうえで必要不可欠な忍耐の徳が、人間の自発的な努力のみに依るのかどうかを問うことである。

ボルノーは、生一般に対する基礎的な徳に関して、コメニウス(J. A. Comenius, 1592~1670)を引用する。「忍耐は、不運や不正を、神の父としての懲しめの答として、羊のように恭順に耐え忍ぶ。忍耐は、そのあいだ、希望の錨をあてにして、涙して神に乞い、雨後に日照のくるのを待つ。…中略…これに反し、忍耐強くない者は、泣きわめき、悲嘆し、…中略…ついに、かれは絶望して自殺者となる<sup>65)</sup>」コメニウスにおいて、忍耐するということは、たんにその苦しみに順応することではなく、未来の希望に信頼を寄せて待つことなのである。この忍耐の徳は、究極において宗教的徳であり、それは忍耐を仕事の際の根気として捉えてしまった啓蒙主義的解釈と、根本的にたもとを分かつものである。

ボルノーによれば、忍耐の徳は、キリスト教的徳の意味だけから解釈される必要はない。それは現世信仰という意味で、一つの信頼するに値する根底を前提とするところにも存在しうる。「なぜなら、いかなる理性によっても証明することのできない、またいかなる失望によっても撤回されえない希望が、なんらかの形でそのなかにあることが、依然として前提にされている<sup>66)</sup>」からである。決意性が最高の徳となる実存主義者にとって、忍耐の徳は無縁なものではない。忍耐が一つの模範的な徳となるためには、人間の意図的な努力だけに頼ることはできない。

安らぎの徳と同様、忍耐の徳もまた「誠意ある人間の努力の他に、同時に、恩寵の形でのみ人間に与えられる、もっと別なもの<sup>91)</sup>」が前提とされたところでのみ、その意味を深めてゆくのである。

忍耐が、目標が達成される可能性を信頼するという事ならば、これはまさしく教育にたずさわる者の徳となる。なぜなら、自分と接する子どもたちの成長に対して、教育者が不耐であるなら、そこに教育は成立しないからである。とくに、子どもが道徳的に責められるべきふるまいや、怠慢・悪行をくり返した場合、教育者は忍耐の徳を最高度に要求される。ここにたって忍耐の意味は、人間的な弱さを理解しつつ共に歩む、ということではなければならない。忍耐は「もはや即物的に相手に適合した態度というようなものではなく、むしろ弱さを持った人間に対して善意の心を寄せることと結びつく忍耐であり、それは、深い人間的結合を基礎にしてのみ可能なのである<sup>92)</sup>。」

このように教育者に必要とされる忍耐は、子どもに対する無関心とは全く別物である。忍耐の徳は、未熟な果実を摘み取ることなく、ゆっくりと成長する子どもと共に歩むことのうちに生きてくる。「そのような忍耐は、個々の不意の出来事や失望をすべて超越して自分の仕事に自信のある者にのみ、可能である。…中略…世界や人生へのゆるぎない信頼に、彼は究極の根底において支えられているのを感じているからである<sup>93)</sup>。」ここに、ボルノーのいわゆる新たな連続的生の形式における、人間把握の端緒をみることが出来る。ボルノーは、伝統的な教育学の連続的形式の理論では捉えることができなかった非連続的形式の教育的行為を、出会いとか危機の概念によってみごとに把握した。しかし、人間の生や教育的行為の大半が連続的に経過するものである以上、それらは完全に連続的な生の諸過程の圏内で考察されねばならない。〈忍耐すること〉の本質を探究する場合、ボルノーによれば、人間の生そのものが敬虔な信頼に支えられている限りでのみ、つまりそのような新たな連続性のなかでのみ、究極的に、人間に忍耐することが可能となる、という。この点に従来の連続的形式の教育学である〈技術論的な作る〉教育学と〈有機体論的な成長に委ねる〉教育学における人間把握<sup>94)</sup>とは一線を画

するボルノーの思想の独自性が存するように思える。

#### 4 開かれた時間としての希望の徳

安らいだ気持ちや、待つことの背後に幾度となく、希望の概念が関連してきた。ボルノーは、ベンジャミン・ウォルフ<sup>80</sup> (Benjamin Lee Whorf, 1897~1941) に依拠しつつ、次のように述べている。「すべてのことを計算しようと欲する現代の技術的思考は、人間の上に実際のいろいろな破局が襲いかかるとき、彼等を頼るところなきものたらしめる<sup>81</sup>。」これは、すべての事を合理的思考で解決できると思いあがっている現代人への警告とみてとれよう。

ボルノーによれば、自己の生や世界の全き深淵の危機を、あらゆる逃亡の試みなしに、自らのなかに受け入れることにおいて、人間は、ある確信 (die Gewißheit) を経験することができる。そして、この〈何とかゆく〉 (es geht irgendwie weiter) という確信を〈希望〉 (Hoffnung) と名づける。人間が期待している場合、それが必ず起こると確信しているが、希望の場合、それが実際に起こることを確実に知っているわけではない。また、期待するとき、人間はその方向に向かって全力をあげて緊張している。一方、希望には緊張よりもむしろ、一種の内的弛緩状態が付随する<sup>82</sup>。つまり「熱狂的な期待、辛抱できない期待はあるが、希望はこれに反して、けっして辛抱できないということはない。…中略… 人びとは期待の際に、期待されている出来事に向かって動くが、希望の際には、それと逆に出来事が自分の方に向かって来るにまかせる<sup>83</sup>」のである。

たとえば、私が試験に合格することを期待するという場合、期待されること、つまり、試験に合格することを先取りしていることになる。そこからは次の問題が生じる。期待しているとき、他の一切のものは遮蔽され、人びとは一つのことだけに、すっかり心を奪われてしまう状態に陥る。これに対して、希望している人間は、はるかに他のものから自由であり、未来が人間にもたらす予期されないものに対して、ずっと開かれている。

ボルノーは、期待している状態を閉じた時間と定義して、次のように述べている。すなわち「人間が期待の状態にいる限り、人間は閉じ込められたような時間のなかにおり、人間は、マルセルの言う意味で、他のことにたいして随意的でなく、意のままにならぬのである<sup>84</sup>。」一方、真の希望の時間的形式は、開かれている。人間が希望しながら未来に向かう場合、彼は未来の全く予見できない出来事に対して開かれている。ここにいたって私たちは、このような未来を威嚇と受け取る必要はない。むしろ逆に、未来は人間を慈悲深く迎えてくれる支持的な根底のようなものとなる。開いた時間を意味する希望は、したがって現存在に対する信頼の表現であり、支持的な根拠となる。

以上の点から私たちは、希望は期待よりも人間の生をより深める、ということを理解する。つまり、真の希望のうちにある場合にのみ、人間は脅威のさなかにあっても、明日に向かって生き続けることができるのである。そのような希望が存するところでのみ、人は緊張を解いて安らかに寝入ることが許される。そして、ねばり強く待ちとおすことも可能となる。ここにいたって、希望が生究極の前提であることが認識されるのである。

## 5 恩寵としての感謝の徳

安らいでいること・忍耐・希望とならんで、ボルノーが人間にとって必要な徳として述べているのは、〈感謝すること〉である。誠実は、「はっきり名指しうる実行のなかで実現される。これに反して、感謝の念は、人間に自らの力添えなしに授けられる、ある関係にかかわっている。…中略… 感謝の念は、それと同時に、究極的、宗教的領域に接触しており、生にたいする一つの究極的關係のなかで完結する<sup>85</sup>。」

それゆえこの感謝の徳は、安らかに寝入ることのできる安らぎの徳を基盤にしているともいえる。実存主義者は、この意味では、いかなる感謝の念も知らないし、感謝の念を持つ必然性もない。実存主義において意味あるものは、自己の決



断だけである。「人間の生は、他の人間との相互作用においてのみ、またすでに形成された共同体の基盤の上でのみ、発展しうるものであるから、実存主義における人間関係のイメージは、きわめて絶望的に描かれている<sup>80)</sup>。」

感謝の徳は、人間が実存主義的硬直を克服する証拠となる。それは、被護性の必然的表現であり、人間が独力で創ることはできない。ボルノーは、その意味で、これを恩寵と捉える。「被護性は、なにか贈物のようなかたちで、いわれもなくまったく思いがけずに、人間に授けられたことを知っているかぎりにおいて、人間がこうした被護性の感情にたいして見出すところの解答である<sup>81)</sup>。」この点で、感謝の徳は、希望と深く関わってくる。希望は、信頼して未来に向かい、なんらかの仕方未来は、人間を奈落に突き落さないことを確信する。一方、感謝の徳は逆に、充足された希望の感情からのみ生ずるのである。

このような感謝の徳を、ボルノーは『教育的雰囲気』において、児童の一般的な生活感情との交互関係において捉えている。感謝の徳を、児童の自然な徳性とみることに、疑問を投げかける人びともある。しかし、ボルノーによれば、そのような考え方は、おとなへの依存と愛着に生きる児童の本質を、正確に捉えていないことになる。感謝の徳を児童の自然な徳性とみない児童観は、青年期における特定の避けがたい危機的状況を、子どもの世界にまで拡大解釈したもので、正当とはいえないであろう<sup>82)</sup>。

幼児は、自分を力弱きもので、保護を必要とするものと感じている。幼児は、このような信頼のなかで、疑いなしに感謝の念をいただく。これが、人間的発達の自明な出発点である。ただし、ボルノー自身も、幼児の感謝の念は、子どもの内的な自立と共に、いつかは失われるという事実を認めている。両親や教師への個々の感謝の念が、より大きな存在によって、自分が支えられていることへの感謝へと進展してゆく。この移行のうちに、人間の成熟をみてとることができる。「人間的な成熟という問題の本質は、人間が青年期に避けがたい緊張の後に、再び、人間的な生を支える環境世界との一致へ立ちかえるかを否かにある<sup>83)</sup>。」ここでの人間的な成熟とは、再び安らいだ気持ちで、感謝の徳をもつことを意味する。

成熟にともなう諸危機を通じて、子どもたちが自立性を獲得するようになれば、彼らのもつ感謝の念は崩壊せざるをえなくなる。しかし、そのような状態が過渡的な現象である限り、人間の根源にかかわる被護されてある 雰囲気を再建することこそ、教育が課すべき不断の課題である。そこでは「教育者は、あらゆる失敗の後もたえず新たにその目標を追求しようとすれば、長期の忍耐を必要とするのである<sup>80)</sup>。」

ボルノーによれば、感謝の徳によってはぐくまれた人間の成熟は、高齢にまで及ぶ。真に成熟した人間は、個々の助力や苦悩を超越して、人生そのものを贈物と感じ、そこに深い感謝を覚える、という。この思想は、ボルノーの宗教的ともいえる人生観の上に築かれた教育人間学となっている。安らいでいること・忍耐すること・希望することの諸徳において、ボルノーは神という言葉 を明確に用いなかった。しかし、感謝の徳においては、特定の宗教に限定することは避けながらも、はっきりと神と言いきっている。ボルノーの実存主義克服という課題は、その究極の根底において、宗教的徳性をおびている。そして、この徳性こそが、広く人間の生を支え、特に教育的行為を支えることになるのである。

## 6 連続的形式と非連続的形式の教育

森昭氏は、『教育の実践性と内面性』において、人間存在の基本構造を、図1のように整理している<sup>81)</sup>。そこでは、自然的、文化的、社会的な各層が、実存的覚醒によって生ずる人格的な層の基盤として位置づけられている。他方、ボルノーは、人間の生を再び意味あるものにする 自然・文化・精神などの諸実在を〈支持的な実在〉(eine tragende Realität)として捉えている。「別の人間、人間の共同社会、こうした共同社会がその生活をそこで形成した種々の制度、さらには生活のなかで生産的になりうるかぎりでの精神的世界のいろなるの力は…中略…端的にいうなら、実存的に圧迫する人間現存在の不被護性(Ungeborgenheit)の経験から、被護性(Geborgenheit)という新しい感情へいたる道である<sup>82)</sup>。」

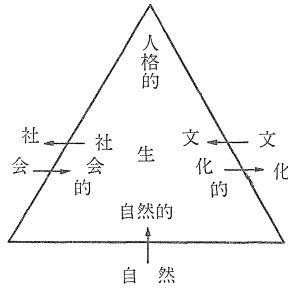


図 1

参照：森 昭『教育の実践性と内面性』  
黎明書房，昭和53年 30頁

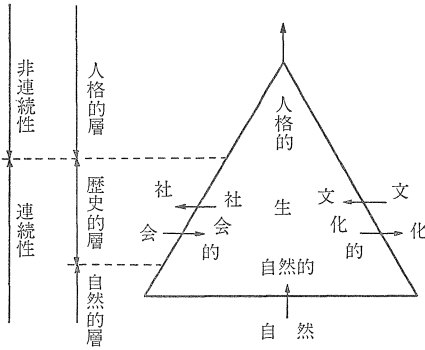


図 2

参照：林 忠幸「見失われた教育の次元」『福岡教育大学紀要第23号』  
昭和48年 19頁

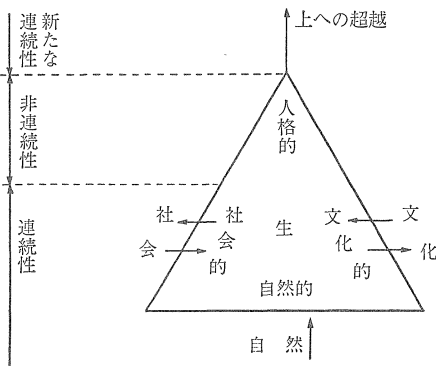


図 3

森氏の人間存在の構造把握と、先述のボルノーのそれとの間には、互いに相重なる点が存する。この点に着目して、森氏の図式をボルノーにおける人間存在の構造にあてはめてみると、図2のようになる<sup>84</sup>。ボルノーのいう連続的層は、自然的、歴史的、文化的層に符合する。また非連続的層は、人格的層に符合する。なお、この図式はあくまでも、概念上の位置関係の整理を目的とする。人間存在はこのように分割可能なものでなく、統合的全一体であることをふまえたうえでの図式化であることを、断わっておかねばならない。

ボルノーによれば、従来の伝統的な教育学の大部分は、〈技術論的な作る〉教育学と〈有機体論的な成長に委ねる〉教育学が、互いに交錯しながら展開されてきた<sup>85</sup>。技術論的、手仕事の教育は、「ちょうど職人が一定のあらかじめ与えられた材料から、すでにできあがっている計画どおりにかれの 対象を製作するように、教育者は子どもを一定の教育目標に向けて型通りに作る<sup>86</sup>」ことができる、という見解に立つ。ヘルバルト (J. Fr. Herbart 1776~1841) が、その『教育学講義綱要』(Umriß pädagogischer Vorlesungen 1835) の冒頭に提示した命題、「教育学の根本命題は生徒の陶冶性 (Bildsamkeit) である」は、この〈技術論的な〉教育観の基本的前提を端的に示している、といえよう。「この教育観は精神的には啓蒙主義 (Aufklärung) にその源を発するのであるが、それはヘルバルト以後の教育学において、もはや検討の必要がない、自明なものとして継承された<sup>87</sup>。」

上述の教育観に対して、第二の立場は、人間の成長過程を〈有機体の成長〉(Organische Wachstum) として捉える。この教育観は、子どもの成長を妨げず、その障害を取りのぞき、自然のままに〈成長させる〉(wachsen-lassen) ことに、教育の本質をみる。「このような教育観は精神的にみれば浪漫主義 (Romantik) の伝統に属し、ルソー (J. J., Rousseau, 1712~1778) に発しペスタロッチ (J. H., Pestalozzi, 1746~1827)、フレーベル (Fr., Fröbel, 1782~1852) と受け継がれた〈合自然〉の教育思想にその端的な表現をみることができ<sup>88</sup>。」

技術論的な作る教育学と、有機体論的な成長に委ねる教育学の両者の見解は、

いっけん対立するようでありながら、共に子どもの陶冶性 (die Bildsamkeit des Zögling) を自明の前提とする点で、共通の地盤に立っているといえる。つまり両者ともに、人間は連続的な発展が可能であり、その方向に人間を陶冶・形成してゆくことができる、という見解をもつ。すなわち、「教育が〈形成〉(陶冶)と考えられる場合にも、また〈成長せしめる〉ことと考えられる場合においても、人間の〈生の過程〉(Lebensvorgänge)は〈連続的に〉(stetig) 一步一步完成に向かって進歩して行くものであり、それに対応して人間は連続的、漸次的に完成に向かって教育することができるという前提がある<sup>99)</sup>。」それゆえ、伝統的教育学を形成する、技術論的な作る教育学も、有機体論的な成長にゆだねる教育学も共に、図2においては、人間の連続性の層に符合することになる。

このような伝統的教育学の人間観に対して、実存哲学の根本に横たわる人間観によれば、人間存在の核心である実存は、瞬間瞬間の決断によってしか、自己の生を成就することができない。そのため、そこでは一切の連続的持続的行為を拒絶する。このような人間存在は、教育によって形成され陶冶されるものではない。実存という人間存在の核心を扱うかぎり、少なくとも伝統的な意味での人間の陶冶可能性を前提とした教育は不可能である。

このように、ボルノーは伝統的教育学と実存哲学が、全く根本的に異なった人間理解に立脚した、容易に相容れないものであることを明らかにする。それをふまえたうえでさらにそこから両者の出会いの可能性を、教育学の立場から探ろうとする。すなわちボルノーは、伝統的教育学が主張するように、連続的発展陶冶性ということが、一切の教育の前提であるか否かを問う。人間の生や教育は、日常的なレベルでは連続的形式で営まれている。これは、図2における連続性の層に符合する。しかし、なおその外に、生の非連続的局面が人間存在にはみられる。「人間の生活には連続的経過と並んで、それと同様、時折特殊なしかたで人間の生活を中断する非連続な個所がある。それは、そのひとの本来的自己への問いかけ、自覚ならびに覚醒にとってまたとない機会であり、この機会にいつその教育的努力が望まれる<sup>100)</sup>。」(傍点筆者) 非連続性においては、陶冶性 (Bildsamkeit)

は否定されても、教育可能性 (Erziehbarkeit) という意味で、教育は可能であり、このような教育的営みが、図2において非連続性の層に符合するのである。

## 7 ま と め

### —新たな被護性の諸徳の位置づけ—

ボルノーによれば、生の過程はけっして従来の教育学が前提としたように連続的ではない。しかしそうかといって、たんに非連続的なものでもない。「教育的行為においても、非連続的な形式と並んで、連続的な形式が可能であり、むしろ後者が普通のものなのである。訓戒や訴えは連続的であると同時に非連続的な教育行為にほかならない<sup>90)</sup>。」筆者は、このような生、および教育形式の二重性は認める。しかし、ボルノーの説く新たな被護性の諸徳に基づく連続的形式を、私たちはどのように捉え、またいかにして人間存在の基本構造に位置づけたらよいのだろうか。はたして、伝統的教育学という連続的形式と、新たな被護性の諸徳に基づく連続的形式とを同一視しうるか、という新たな問題が提出される。

ボルノーは『教育的雰囲気』の結語において次のように述べている。「旧来の理論ではとらえられなかった、このような(第三の)可能性を、私は以前、出会いとか、訴えとか、危機等々のごとき、教育の〈非連続的諸形式〉において浮彫りにしようと試み、それらを独自の教育学的範疇として把握しようと努めた。しかし、今やここに、全く違った方向に、新しい教育学的基本範疇の可能性が見られる。しかもそれは右の実存的領域におけるとは異なり、完全に連続的な生の諸過程そのものの圏内においてなのである<sup>91)</sup>。」このように、ボルノーのいう新しい被護性の諸概念のもとに展開される連続的形式は、上述の伝統的教育学における連続的形式と、明らかに質的差異が存するものであると考えられる。図2における連続性の層に伝統的教育学における連続的形式が符合するならば、新しい被護性における新たな連続的形式は別に位置づけられる必要があろう。それゆえ次にいかなる位置づけがなされるか、ということが考察されねばならない。

この問題を、高坂正顕氏の『私見、期待される人間像』（1965）を手がかりとして論じてゆくことにする。高坂氏は、実存哲学と生の哲学を〈超越〉という共通概念で明確に区別する。彼は実存哲学を〈上への超越〉と定義して次のように述べる。「キルケゴールにおいてはけっきょくはキリストの信仰というものが根本にあり、本来の自己（*eigenes Selbst*）が求められているのである。その本来の自己すなわち実存（*Existenz*）は、神への超越、決断による飛躍を通じてのみ得られるということを考えてみれば、キルケゴールの実存主義は、いわば〈上への超越〉を求めるものだといってよいであろう<sup>64)</sup>。」この〈上への超越〉は、図2との関連で考えるならば、人格的層の上方に向けて、つけ加えることが許されよう<sup>64)</sup>。

本論の44頁で、安らいでいることの特徴を次のように述べた。「この徳は人間の方だけで獲得できるものではなく、恩寵として人間に授けられている一面がある。私たちはここに、安らいでいることの特異なパラドクスーをみる。」つまり、上への超越においてはじめて恩寵という概念が把握しうる。そしてそれなしには、安らいでいることはできない。ここに、非連続を越えた新たな連続性の諸徳が問われるゆえんがある。同様の思想は忍耐の徳でもみられた。「いかなる理性によっても証明することのできない、またいかなる失望によっても撤回されえない希望が、なんらかの形で忍耐のなかにあることが、依然として前提にされている<sup>65)</sup>。」希望の徳においては、予見できない未来に対して自己を開放することによって、種々の要求を意のままにすることができる。「ここにいたって私たちは、このような未来を威嚇と受け取る必要はない。むしろ逆に、未来は人間を慈悲深く迎えてくれる、支持的な根底のようなものとなる<sup>66)</sup>。」さらに「感謝の徳は、人間が実存主義的硬直を克服する証拠となる。それは、被護性の必然的表現であり、人間が独力で創ることはできない<sup>67)</sup>。」

これらの諸徳に共通していえることは、非連続的形式を上へ超越した後に獲得する支持的な根底、という新たな生の連続的形式の思想が存することである。これを図式化してみると、図3のようになる。すなわち、人格的層の上に、〈上への超越〉が位置づけられる。それに符合するものが、新たな連続性である。この

ように、伝統的な意味での連続性の教育と、支持的な根底という新たな連続性の教育はまったく異なった位置にあるという認識がされなければ、ボルノーの実存主義克服の真の解釈は困難になるのではないかと思われる。ボルノーのいう新たな連続形式とは、実存主義的な非連続の形式をふまえ、それを超越した後にはじめて獲得することのできるものである。同時に、それは神の恩寵としてまったく上から与えられる支持的な根底なしには成立しえないものである。

## 註

- (1) O. F. Bollnow, *Neue Geborgenheit. Das Problem überwindung des Existentialismus*, Stuttgart, 4Aufl., 1955, 須田秀幸訳, 『実存主義克服の問題』, 未来社, 1978年。
- (2) Bollnow, a. a. O. S. 39
- (3) Vgl., Bollnow, a. a. O. S. 42
- (4) Bollnow, a. a. O. S. 49
- (5) Bollnow, a. a. O. S. 54
- (6) Bollnow, a. a. O. S. 57
- (7) Bollnow, a. a. O. S. 59
- (8) Bollnow, a. a. O. S. 63
- (9) Vgl., Bollnow. a. a. O. S. 65
- (10) Bollnow, a. a. O. S. 66
- (11) Bollnow, *Die pädagogische Atmosphäre*, Heidelberg, 4Aufl., 1970, 森昭, 岡田渥美訳, 『教育を支えるもの』, 黎明書房, 昭和55年。
- (12) Bollnow, a. a. O. S. 22
- (13) Bollnow, a. a. O. S. 22
- (14) Bollnow, *Neue Geborgenheit*, S. 76
- (15) J. A. コメニウス, 『世界図絵』(J. A. Comenius, *Orbis sensualium, pictus*, 1658, hrsg. v. J. Kühnel, Leipzig, 1910, Abb. 114. 正字法は今日の用法に準じた) Vgl., Bollnow, a. a. O. S. 81
- (16) Bollnow, a. a. O. S. 83
- (17) Bollnow, a. a. O. S. 85
- (18) Bollnow, *Die pädagogische Atmosphäre*, S. 60
- (19) Bollnow, *Pädagogik in anthropologischer Sicht*, Tokyo, Tamagawa University Press, 2Aufl., 1971, 浜田正秀訳, 『人間学的に見た教育学』, 玉川大学出版部, 1969年。
- (20) この伝統的な教育観の二つの捉え方は、ボルノーの *Existenzphilosophie und Pädag-*



- ogik*, Kohlhammer, 5Auf., 1977, S. 16~18 で詳細に論究されている。
- (21) アメリカの言語学者, マサチューセッツ工科大学出身の技術者
- (22) ボルノー, 『対話への教育』, 玉川大学出版部, 初版, 昭和48年, 60頁
- (23) Vgl., Bollnow, *Neue Geborgenheit*, S. 110
- (24) Bollnow, a. a. O. S. 110
- (25) Bollnow, a. a. O. S. 112f
- (26) Bollnow, a. a. O. S. 141
- (27) Bollnow, a. a. O. S. 143
- (28) Bollnow, a. a. O. S. 143
- (29) Vgl. Bollnow, *Die pädagogisch Atmosphäre*, S. 38
- (30) Bollnow, a. a. O. S. 38
- (31) Bollnow, a. a. O. S. 40
- (32) 森 昭, 『森昭著作集3——教育の実践性と内面性』, 黎明書房, 初版, 昭和53年, 30頁, 参照
- (33) Bollnow, *Neue Geborgenheit*, S. 23
- (34) 林 忠幸, 「見失われた教育の次元」, 『福岡教育大学紀要』, 第23号, 昭和48年, 19頁参照
- (35) Vgl., Bollnow, *Existenzphilosophie und Pädagogik*, S. 16~18
- (36) Bollnow, *Erziehung zur Frage*, Aufsätze und Vorträge, Japan, 1976, 森田孝・大塚恵一訳編, 川島書店, 初版, 2刷, 1978年, 216頁,
- (37) 金子孫市監修, 境沢和男著, 『現代教育理論のエッセンス』, べりかん社, 初版8刷, 1981年, 188頁,
- (38) 前掲書, 188頁,
- (39) 前掲書, 189頁,
- (40) 村田 昇編, 『道徳教育』, 有信堂, 初版, 1983年, 77頁,
- (41) 金子孫市監修, 『現代教育理論のエッセンス』, 193頁,
- (42) Bollnow, *Die pädagogische Atmosphäre*, S. 110f.
- (43) 高坂正顕, 『私見, 期待される人間像』, 筑摩書房, 初版, 1965年, 78頁,
- (44) 高橋 浩, 「ボルノー『希望の哲学』における生の二重構造と『超越』」, 『国際基督教大学学報, 教育研究』, 第25号, 1983年3月, 43~58頁参照,
- (45) Bollnow, *Neue Geborgenheit*, S. 83
- (46) 本論, 16頁
- (47) 本論, 18頁